琴後集

三

ヘ 2
4328
3

帝国図書館蔵書
故光清風氏
大正三年十月
三十日
光花華氏
寄贈

帝へ2
4328
3

帝へ4
4350
3

帝国図書館蔵書

琴歌集巻五

恋歌

恋

やまのうぐひすたきをのんすゝ恋ちはあくぬなゝひるゝん
むさゝとゝておやのんゝ

ゑしのすゝぼくちゝゑんすゝもゝゝてゝやすゝゑぼく白玉
ちゝをのをゝ沢のゝをのあつゝはひよゝとくゝをゝもあゝはし
さゝ沢のはゝすむをのゝ刈るつゝ人よなゝつゝ妹なゝふくゝ

初恋

ゑゝをゝむゝゝゝわゝうゝれゝゝもゝすゝゝもゝえゝゝをゝゑゝひゝさゝゝめゝ
ゝゝき初ゝゝをゝの松やゝゝおゝくゝゝてゝゝわゝもゝひゝもゝいゝゝてゝゝゝゝゝ比ゝ

不言恋

本くれて人すくなくれぬになりのふるえだをたれかはやらん

才を祝して言ひかぬ恋

たぬきのたのうちなるもそこあやうひろきはあとをぬすはく
才乃ふるをこひすまいふるもそこふる人まはをすはを

思不言恋

おもへども言ぞ言ぞ言の葉のむすひはときぬんをいろはてす
いとをおもふ

言を出て言ひも竜さんあなたいふ人よりはをもさしめや
色を出て人すくれぬになりのふ
あふのはのうのうをあてはいふをすももまもむせふとそれてふる

元始恋

人ぬすいなはのはのをはてつくんをいてやまあや
いひすむ

はや琴のをとをあてもはもひんさはせはいふ
ふまきき人をこひをて
いひ出て才のこひはふふをそれんさもやきたをを
ふをはをみをを人をんけく
ねはすすつみ雨けをかてやいまを恋をはし
きぬをもんをきをもつ揺あをきをそれの下ひも
をぬ人
ちりてををはもをのへをの際て敬ををのすをみるねを

五月の五人よ

なのあれいたはるとあもみそものを学あひるる紀人や何なり

恋歌

ふるとて言みなかいてを初め縄のうきふしつらて年八へぬとも

もるとてをのふ泪乃いつまりのつらに浮まはをむき初きん

互恋歌

う紀ものいはなのさ母くありといへをちのふ人をかはるとりきり

月歌

ちまのこきくの隠重よひろふてふひぐくんを立やりさん

見歌

今をうるくさりはるとりとひいはもあるぬこひしきり

稀人歌

ほのみはるをりりすれのやふさるる霧のよりは月を隠るて

うれまとをもたなん

ほるを居るとくるるをたのまし赤よるきちんをりもそやと

白地歌

あふもうなきおかをもん中紫のをるる中乃ちきりい

梓弓れおのしまるとしのふるんやるをるりの袖をなりを

通書歌

色をは学ようこ隠のを由みをかまふ法こりををたのまの

月立歌

ひをこをせるあの出をるいをつるちみををのをもうふこ後ど

被返書恋

ゑはさはすくすもむきひめのかたくいせあくらつと思そん
あくあてすせあ女よ
いくほど深やいつなれ衣角くはあ一の色妙くして
あくてくくなりめれてつとふきくへよ
いくほくよんなすくよ月り深ぬ六おくほすきかよも絶おて
祈後年恋
祈ることいつかひあくへ一の滝さえぬ思ひよ年をかさまて
契久恋
ふくへき祈やーのくへ人き祈河あれてまたの世をなのくはく
逢ことの恨せの出乃うあはすれはぬ色をちきりもくふ
年月をへくて絶りあくさもあるへよ
うもふくあくて年を布る衣ぬふはんを思ひき祈や
別恋
なもひ出くかくも恨なれぬ夏のんくへよすれむーと
別ほよ人ふくんくくよ恨てなきまもらほこくおき
則不逢恋
ふくはさはふいくあ中なれもあくるほきてくまきぐ
憑媒恋
ふあくくあの四ひ一国の梅なりぬときくもうれりきり
人すくくはくて女よかくりて
一すちみたもいをひのいさく水すはよはるきあ人をそれ

不逢恋

あふことをたのむ命をはもすれば
神仏よかくる小侍のしめくちなわ
いとせめて多てしくいとろふもいとはしかるほんとやすし

詞和不逢恋

はつかぬことはてつきゆみたもひこりよといひもそるて

不逢恋

いさほろよ海ろこの衣ろかくれるかひろもあし

百かもて恋めくのみめもみそねと

はつ根の恋ものあり月もしし吹ろ雲と独ろやとして

待使恋

逢ことはろろの候ろて毎夕ろかよ法さへたふめれて

逢恋

とまぬ月のろにをろつるあれ恋ハ逢根も逢と行ろろて

初逢恋

ほれもおくなるろ方ろろひも行もひろ人さ一ろ宵ろきり

恋くて行なーんよ行れひものむすひろあはるきみろれし

ろれさをつまんものをきの夕まてほろぬ袖と何かこちきん

はめてあくる

あふてのんをちくよてきぬ一行の袖と足てて人もろ

逢情恋

病牛かもす枕のほとろふさふ中くてろひちはろきろ

あさなさの人なりせハたもとさきのかはるゝ斗ぬれもしやハ

祈逢恋

せめて逢みてこそハとしのわれ命にかへてのちのわかれも

年比あひ見ぬ人に逢て後つかはしける

いはゝよ涙にまさるくやしさも逢ミてこそハ思ひしらるれ

暁別恋

暁の露をも中ゝにほしとや袖のわかれにかゝるなみだか

兼惜別恋

有明の月のあはれもはや先たちぬるやあかつきをまつてよめ

月あかき夜人の帰りて又のあしたおとつれけれハ

かゝふくさうしとみつゝもあかしよに行よの月乃あかくひかねと

後朝恋

帰るさも末ハ花やちきりし人別にあかてもなをちかくもとも

一夜逢恋

人に縁かるあふひのありといへハうらめしやあかぬ一夜も

おなひきいそ祈られねなよ竹の一夜もかれなくひかれハ

二夜へたてて逢恋

あさ枝をハやこのうつるよるしてさまさハ夢にあかすしものを

遇不逢恋

さハこの花のこゝもそ恋ゝもの七夕もこれかかへ人

契りおくをも命によそへつかともあふへき此身なしねと

中絶し舟ハあかなくによいとひつるもうきなをも思ひあす世人

名の紙をなをさはすれハいとをひきんとかおりのとれんしを

興天法令古何日

あふせとはいつと契らんうれのほぶぬ舟をあのくひまて

おおた

結をとゝまぬなき名のいとなれいかくまて人のほとゝやすん

なれ名をたゝ人る

元ゆゑよいひさわゝ人をもなれ名をたゝれ浦

めれきあ

さゝあふうきあるきんるゆれ元ハ古行秋をまくさせや

名をゝしむ

あひゝふ中をふくよいゝあつひはもんうき名ありとも

悔恋

信もふゝふつきて悔きはつをなくるゝもりんきり

身をゝまゝ何もあんうりえゝもほひよゝやすのかひる紙

名恋

あふゝはゝやく舟のゝれて寄ゝふ度ゝをゝや嘆

舊恋

なりしみ世をのゝやゝのゝんうりあゝい思ひゝれて

ゝまゝあいひ伊りきゝ人る

ひまれのゝをゝ四ゝ年の法宵山ゝき後ハと契りおきしを

茶ゝき四年のゝゝゝ絶ゝてゝものゝ後る面をひきゝゝ

年理ゝ

おもひ出よたるそてつあの産せふうゝやれてゝいく秋へゝ

あひ思ふ

涙もよりはるかきりのさきみもそひはせゝ色いみえきり

れもうつ人まもみえつまの変あひそてんいかゝうまゝやハ

思ふ人恋

心ゝてすきもゝやひれな人物もさゝもあるあるゝ

おもひやん

人を思ふゝ物いゝそよわるへきかきとるる海て対いやせぬも

あおもふ対ハとやこもゝ雪なれやあゝやせくまゝ海さりある

忘恋

我斗祈なきとやみすのかりも人のゝうれもせぬ

恨身恋

思きれぬ中の行さも我ゝゝみとりの神のゝゝ先きで

恨久恋

行をかさふたへても年をるゝ衣ゝむゝるもそれてゝくふ

秋恨恋

萩の葉ゝあぬゝ物のいゝなれいあ犯てふゝゝ先さわくゝん

さゝぬゝま変ゝふ神の月をいふみとゝ人乃つれるき

絶恋

絶ゝゝ人のゝ物ハはゝゝておもひるあゝゝ今いゝやゝき

絶不逢恋

偽乃ゝゝの思ゝるゝゝ出て泣すゝ人をまゝやゝのゝん

人のつくなれ

一枝をあまりかゐをつまりかゐをつまりかゐをからち別き人

人うゑかゐをなすひをたのむじすくとかゐぬをりもありやと

ゐひくもれ浦をくの本ちきれも

うゑ紀あをたもひ巴めぬ丹ゐ法のつれるりひを今うれき

ちくひ紀をる意

ゐ国さる谷の根てすをけるゐ口すをせもたくをそくく

くををもあハたをもかを糸の浦るをのう紀ゐしをは

変意

ゐををれハかををゐの人乃芝我のをやをかくたのをきん

人うゑかゐをれハ

たかををかををくかをる人の花もをんきり

色かをる神ハあやゐふむをさ紀のつをれとをそ見ひるあり

たとをく

をのつれハ我をたなをる人をもう紀ゐのうへをゐたれつを

艶女遍他人意

咲ををめれぬ京よあをくよをを人あを見ひをを紀や

並面意

ゐををけををゐふうをせハは年ををゐたをのゐもむつす紀

心家意

をををたゐを紀ゐ心のかしあをハ人めいをは生ををもゐ

意里

うはりあてなれぬ大井の里住る尼寂仏を尋そひき

為平恵

浦人をたまへりをいるそん小島をゝ紀のゆゝ乃ゐるよ

知らりあふ我をやさしを雑ぼにのあるゐる年をかさねて

閑恵

名のゝたゝあるさゝ山のくひもゐ　ゆきゐ関を中ゐ屋ゝて

安法恵

かち枕みやこをかゝよ着　あゝ妹をゝぬゐる　丹ハゝめ

旅恵

たちゝをいつゝきもゐるあゝ海の杖とゝくもめゐ神ぐ

ある曹司の人を過てきるゝ紅ほゐるものを

いひもきれい

ゝゐるたもいゝれもあまを才ちあをいゝなゝ

枕草

ゐゝり深てうちも掛ゝて本ゝてゐのちゝゐ石もいゝほゝ

宗月恵

秋の夜のあゝきゝひのゝてもゐ山ほを月のゝてゐなゝつゝ

ゝきゝゐをゝをひつゝきて月ゝれゝゐつゝゝ神ゐ新めやゝれゐ

恨をひなみゝる月いゝくもれゝもなゝ月もゝきのゝをほりつゝ

宗草恵

いゝゐゝゐゝをなき名のゝをめゝ人ちもほゝとゝひきゐ才を

恵の心おゐゐゐゐ　ゐハなきものを何ちりの才をおもひやむへき

寄河恋

深きとも浅き川瀬の紙やすくてふ名のみたつをあてあるる

寄流恋

おもひあまりたつた流の糸なれやむすびつれてせくすもふし

寄明恋

はてもなくおもふ心にくれぬ程むさしのもかぎりをきり

寄関恋

ゆきなれぬ夢をそよぶ関なれはもりすてん笠をそこのまん

寄海松恋

みるかるもいもかいるあひねの浦をふる浦すて

寄多恋

いつたりまてあてそれぬすりあかひなく人を恋やそ人

寄春恋

をふさとりもるれぬあをあ〻春のすゑの人の恋きやなそ

寄貝恋

いつ〻〻拾ふ人なきやれ貝をあされ方のこひ〻そみる

寄灯恋

いつ〻せん秋のあり秋の光も一次をかきはくせ〻をめ見ひと

寄金恋

あ〻〻〻〻〻〻やこ〻の宮こ〻のうちをきて〻る年とも〻

寄鼓恨恋

かく〻はし神のなみくの布りはこみをまあ〻なくも恨の方や

寄鼎変恋

人〻なとそ〻まも似すなりゆ人かゝ〻のあ〻のゝつ石井ま

家秋恋

月の秋は絶めつゝさハ紫ゝへとつれなき雲乃いのち何ゝり

寄秋霧恋

いつなゝり〻契ゝなゝ人秋ゝとよゝ紀月を雲のおもゝゝ後ゝは

琴後集巻六

雑部

天

動なゝ日嗣の位ゝゝゝ天乃波か宮を云ゝゝ仕ゝへて

月のあめゝ星のやゝゝも行めゝるゝの乃ゝゝ世紀をたゝ孫

雑地儀

雲もさゝゝこゝもやゝめぬ弓代を山と川と沐例ゝゝゝ天新

風

やゝ松ゝゝゝゝ琴の夢ゝゝゝ為ちまゝ雲の絶ゝまなり

ふもみちゝはゝゝもちまゝをゝゝ紀を風ゝなゝおゝれゝゝ

古寺嵐

かくれ家を峰のあらしのさそはずハ世にある寺もありとしらめや

雲

ゆくへなき身のうきや雲とうきていつくへたのまん此世に

夕くれは雲のはたてにふきて

さしあたる身の末ことゝみえても見へハワかれてかくれゆくかな

泊舟むやひかれる舟沖つ舟にも見よ雲ハ風もやうかも

雲煙山詩

たかきある山やの端をしるへきて雲の中ゆくありける山

深山雨

たちのほる岩のうき雲に耕て樵夫か行くる村雨かな

雨中待友

ほとゝきすのなかまよいうくるさ波し笠やとりても人ハとはなん

夕やミ

夕やみにあさちかもとハたとるとも月待ころそふんもう那

山

山としもなかいゝの牙をかくさる人に紀山の荏よしつれなし

やまとのうつるを何のかひとそる詞のちかり乃あるはうる舞

名所山

旅人乃あさぢか原黒の山ちる耕のめて名ありハおひきん

天香山

日の御すめらきこれハ大君乃御門おほゆる天のかくや波

富士の山ふ雲のうへゝをこえて

早稲田大学図書

んあてよみしたり雲ハ榛まてなもとめ雲にはきふしの緑

山家

あしひきの山乃やまひとすむといつれのとしに毎木きる人

山畑

こゑくるはたうち人のあるをこそたちぬ山路のよそにもきこゆれ

なるふさく咲のよほいよみえもして霞のこるはるのやま畑

晴後遠水

水上や雨のなごりの山みえて平ら見ゆうふちの夕日かな

名所瀧

大君の御代乃名にしもおひくるや老もわかえし瀧のましら

湖

浦風のさそふ雲は住ともさわらぬ湖をこえぬ舟

淵

世の中をおもふ淵瀬をゆく舟のかしくや瀬もふみこそせん

海路眺

いさり火のかすみは烏めにおもりて浮しかの沖つ百舟

みやこ

移りゆく世のすがたをもこゝにみる都乃人のまことなりけり

古て

ある畑に苔むすかたちいく世経て野となる星のむかしを忍ぶ人

すはゝつく

なはてぬ世をそたくへ人はかくて多くしらぬ西の名残を

うくかく

すまかくを何とゝ分ていえん消をあはゝふ人のゐ苔は

ほのゝみの井

没ゝの人いゝ苔の為よとてなゝりゝの井をハのこせし

仙家

ゝまゝへゝたちぬ苔ある宿なれや霧の必ゝ絶もくれるすて

閑居

牙をくすたくひゝるこゝろ苔の落ゝことなくて苔をゝるすゝ井を

ゝはもぬを何ゝるきくん引ゝもむふすりも友なゝるものを

世のゝゝはゝひゝすれつきゝふもまゝ事のすさみゝ日をゝゝすて

宗左独

まゝらはそむきはてゝゝる窓のうちゝはなゝゝゝ次の苔をとはゝ人

清山の名もとゝゐ苔を折れる法師のもとへ

くゝ山もなきゝんゝ乃月のかゝらむゝ紅苔のちりをはゝひゝやすむ

林下幽閑

村雨のたのつゝゝる琴の音ふ苔のむ一枝乃蔭ほゝふなり

傳

みをかゝふんゝれゝゝやゝ有ゝ一の後アゝやすはゝ川をゝゝゝりハ

石ゝたてかへせゝものをみやひをゝ陳一あつゝゝゝたのゝきゝん

窓

風おゝ紀苗のまゝゝうゝゝねゝあゝりゝゝ世のゝゝをゝゝ一る

ゝたゝきゝゝゝゝ柏木ゝ亭ゝ郭ゝのゝゝをゝゝ

ふるさとはとく帰り来て見る身にもやらぬ末乃ことかゝらなくに

大堀正輔か彦根へ帰るをおくる

ちかけれはまてや床の山さくらちりぬるはまつもかひある日を

清水雄風か香取へ帰るをおくりて

もろともにゆかましものを香取かた磯の浪の花もみるへく

越後の国にかへる人のいとまこひける時

こし人のこゝろのこれもえへてみよ思ふ山さへ折てかさしは

卯月もしめつゝ上柳孝思か本郷村より都へのほる

にわかれとて

今もなほ本郷山さくらちるはあらは君か香をつけ旅の衣に

卯月はかり太田延年か都にのほる山の行をおくりて

なれし山にひとくみすりのみちにこりさくらの君かあとをはみめ

八月の末つかた長尾京隆か都にのほりける時よみておくりける歌

いにしへあるは月にたとへ秋の秋のいつくはあれと云ろ深のいろを

もみちはにむかしたのもしさるの山こゆきのあともみてとみよ

なしてとひてよ旅の君は蛇もみやこは都のきよまよるなきり

ことの葉乃色もかはらましけのつら都の人りたまへるを

長月の廿日あまり七日の日部解田判友正邦か都に

かへりゆくをおくる

ゆくは別これおりおつらはし河乃名や渡りてハ君にしらせよ

ことのはのやしろをさゝハ家居にまかせも逢ひて人みきこえハせよ

山口左言ノ母ゝ〜をこもるひて月延ばすまゝ川ゐり
元政上人のあるきたなりもろいかれてなんいひやりきる
芝をへてもかきやすむ人ほの月むかしの跡をたゝしても尽よ
小ぼるふゝ〜ゝ香取ゝをたくりて
いさゝはとねの河あをゝ切のゝ人をすまさとい来ませ波のよるゝを
賀茂季鷹ノ父のうちとつふときゝて立ち寄へ花ゐ
よつうゝとてあふきるをへて
四きゝてゝあやゝあふきの風〜あれ〜月のあつ〜さも忘れん
ほゝ〜へゝ人とする人ゝ麻毛なる馬をたくるこふ
こゝを影まて
はゝ〜かゝ月の四くゝ山をきれとんをゝたくゝてゝやゝ

ゆゝへゆゝる人ゝ屋やゝて
天ゝゆゝあふきてふゝをいあむ乃ゝ風のゝとりを口れすもふ
まなゝさゝ花をひも出よかゝ月のさりゝはりゝをゝ〜ゝほひを
かゝゝふゝ人のをき國へゆゝふ後をゝれて
いのちあゝゝさゝゝも天ゝもろかゝゝむゝゝんまゝのかゝゝるはこよ
經波へゆゝ行ゝ人ゝとゝきゝる時みて友ゝちのもゝへおゝを
きゝる
行ゝて春經波ゝりゝのあゝ風ゝすむゝん月をひゝりかゝもゝん
旅若菱
ぬゝゝゝちゝハつすれんものをゝは山乃ゝ紀をまゝこゝる菱ゝりゝふき
山家

をけはるせとそ思ふの中もふなほへさとの春をはゆく
世をとふうれしのもいつの世とふ不二をとは人桃のえふもと

山家雲

天をうちまる雲の本ちもうはもれて谷すりのほる峰のそら雲

山家烟

みなの雲まくやすしえ乃夕きりうんほをさ紙えるしらせて

山家夏

をりくるかすふ夏こをあそれなきうしをそむきし都なれも

山家行人

家やまもみちをこそき紙をたく雲ほそうしきをりもをきり

山家送年

ふるまれもみちをあをそ山さとをそ一年のさりうして年を海しど

田家

いと田あるふるのいりまりと紙乃をうほをりかくるをとの竹き

漁里

みくはの浦のえ夏里さくと紀をもへの波乃よ紙をそうみる

岡藻

かをえをくほをのをるのをさし不むもなしあへす家をみをそ

江松老

すみの江乃松や神代のうなん老ぬそふ名もの年へをきり

大井河入えのまをそをの久みをむしをとをしかをきやあをぬ

神

はるのあさゆふこがくる玉串ふ神代のあとは此まものうれを

四つる柴

四つる柴の中なる若竪の色よりんとさらに一きの宿のしるしハ

きさみ

四くれのはるあらゆまあさのあるはるあこあや峯の一枝をを

鶯豆腐

あらはのうてうこきり沈月のあしのあしのうつ波ようとみてしをを

時鶯

時のうきをはきをしいむうしまて祝あおくさむとりの聲じ

牛

引うしのうしひあうすやゆ車の引れとうき音はるふうを水ハ

精

皆ふうを霜ふ色をふ木の葉さる秋ふ引きをかつあもるし

猫猫貝

若海乃浦ふまうくいさう貝波うきつをてきれうひろ色し

書

三地のうはきをしあもみてをう神代の書と今まはるを一て

すやをの面世のふ乃やりぬをもふうてをき法ハ乃を

引うしのあせはゆるまて法ををてかりぬうふうの書をう俗

板書知昔

くをうは此まのさもしうはうん加をて主き法とをはすハ

神代山陵考をうてある

かみとすいかそ〳〵ゐ神の代よりそなきんちの跡とゐ

文

ちら〳〵ゐく文をあやしふられいかつむしの人はあふうちして

名王寺の石もて作をうすらひと名つきてあ

作のうゝまりつきてゐる　石は白くうすらひの文あり

世とわうゝ人もかくそうすしひをふむいうこきうゐるゐ

越の君乃小丹の杉せりきそうれ木の枝のうゝま

うれ木もそすり世をさうあへきうゐ原のふ乃まそよ逢ふ

弓

をれかれる流世乃ちりの梓弓引ふゆるゝうまふ乃ゐ

やしは國そもむしの孤とあてゆうんのうつきうゐ世もり

笠

うちもれて紛うちうあ君すりみえくれする孤は笠ゐ

やよひうゝり自寛の家火あひてゐ孤つのあなき

うせぬと世て作笠なとてうしておく包笠よ

ちゝしきんこ世のふを木のもとゆきかすろのよみ人の為

笠

たのはうゝんのゐ世ひさなれを笠とうゝうきじ

梯

さゝ橋やさゝも人ゝきたあとてうつおの宮よきふ宮ふし

もゝゆひ

もゝゆひの君いあやふふむさ紙洗ひうあつるはもゝゝを

すだれ

かやうのすきはおかるいまたれ月もれとやゆり初きん

かたゝ衣

中くみはりもおすはかゝ衣やくるたもひきえんさゝ原一を

袋

きるゝせるゝの衣の袋こうあてへんをはゝむしきる紙

帯

紫もみとりもるほのゝやゆ姫のゆゝの帯を去まゝひふき

あや

雲母の白屋をさるゝあゝゝやらは多機よおれぶんん

車

行めるゝ王のゝゝもゝ小車の弦もかはるめるゝ流代ゝ那

帆

風ゝゝ吹ゝすきゝ沖つ舟はゝる帆なはやいくよあゝん

なくかを

海士のゝゝひろゝく絶ふゝく雲をゝゝとゝやゝみゝゝん

火とり

はれゝくの友ゝなくさむゝ紀あるひゝゝとゝはゝえゝさゝきち

はと

あゝかゝ海原の月乃玉なゝいひろゝてゝゝよひ須つゝゝせん

かゝみ

みゝとゝきゝゝ海ゝ鏡ゝの加ゝゝゝゝはゝれゝゝゝたゝのゝはゝぶ

梁

梓弓いるさのくみのゆふせるおほるあのしら波

奥梁

梁うちむすかりやはらあんのるれて　そこよたのひおよ

古堅若　以下廿二首詩題

雨ちく　彩のひたるあ　注戸杉て　若むすかもいくよめうん

毎河篠

世ちむくのこ山ほ〜のきほ〜すむ人あれとる人おし

巖上雲

う　ゆありてうもみえぬうのきなふ　紅ゆふよりかへるん

巡徑石

むうれ　島ゆあむとて　路のへよ　ふ引のつてひき　ぬしきん

除彩桂

風きよ　紀あよを　彩ちふ　仿とりて　月乃かつの　ふもうほへて

林中翠

雨ちく　楓うちあなほ　木ちち　風もみとりよ　なひくとて　ちう

棲烟鳥

ちち　柳のゆふ　ちく　枝ふる　ふくさ　ちむう　村うす　卵

宣溪草

溪ふき　方のつく　茅さる　ちるく　ちもあて　年をつむん

陰崖竹

ちよう　ちさか　ち山ま　よまる　竹さく　もむな　きんを　ちる

姫人然服散

ひとり身をあさましくおもふ孫ふたりをもたせむ命を

愛妾換馬

うるはしきをとめをたてまつる人のまひの袖よりかをるにほひく

銅雀伎

かをみてをりもこりかしこまる神を君とあがめや

玄人斜

秋風の雲ふきむすぶ糸のもとふゆもかさしの玉をうるみ

孟門行

おきさかる雲の色うつさるよりうれし岩根あむてふ出あふ

国然

春のよろ爰のかたやなのむらん産とあるゑのゆくへをすく

舞宮人

むすべやなもひまれぬ玉姫のなほりうる紀ふのかさしは

経歌妓

かりてふ春も一時さくふるまを春をやうていつとまつ

小拉仙

こゑとせよなるそふ桃をうひもてう廻やほりのはひるうん

てれもさ紀もみちもあてを春秋をうるとむるつうの宮

聖のうへの神をつるゆうあまとあ月のうやふすむやいつて

なるあの閑とあるを雄うらいをもを菊乃春をふ水

時のうる波極ゆみをきいくあ里まもよりゆるかつる山人

雲の中へ雲乃うとくるる比乃うち霧をすゑてはとくやられ
あの江の人はたさやわ〳〵人後世まする爲の一ぬち
すゑ〳〵ゆる世の名をとゝもいくゝ〳〵と夢霧よりあり　桃のうゝもと
雲乃上を忘るあくへき星もあれや世のもゝせを一まそり て

銀白

はく雲をはゝ〳〵もとゝ霞乃春みとりまかへゝはるをまつとて

玉樹後庭花

春はかくありとや忘るうゝひき人去ハ春の月ゆゝものを

陵園妾

はの門さもいく世ゝ乃ゆきゝしも淺き木の葉を才のくゝひはて

上陽人

忘るとち孤燈ようゝむ夏のうちまいく春秋をあもれとゝみし

玉昭君

由をかゝみむゝもうしと春のふゝ人事のすゝみのさゝふく紀せる
いゝすゝをんゝもやゝん口乃後の引ゝゝむ〳〵き女ひちゝゝぬを

浦島子

ゝゝ久〳〵を後ゝとゝひきん女ハみ〳〵もあれなりゝて世を

法師

雲乃をはゝめゝこゝ後とたゝもくゝまや本のもとゝまふゝ法をゝゝめぬ

漁人

君をゝゝまさゝゝあぬ磐ゝ釣の糸乃ゝゝ後ゝくゝや世を後ゝゝ

樵夫

山ろをいひおくるを聞よりあれい誰もなきおとをうらみきり
ん
うらといひ哀と打ふ程なくい云ふことの聞もちきゝさ面し
思
よしあをゝ〳〵今とたゝるはいとぬたもひもある世こきり
正橋立
神の世よ神のかよひし弘なれや雲ゐふ陸く〳〵天のうち立
子世古乃
あゝなはゝ芸の古乃さるゝゝめゝ乃さるてよし面よふとも
日本紀竟宴より天武天皇を
いゝつちのひゝきも絶てを地ようきひしゝとゝ面さゝかきろ
年所宣云ふ古事記伝云てゝ竟宴のうゝ云ひきふ
神直日神を
まつひのあゝひ問ゝせゝと神直日神のみゝ毎やあれすまきん
ぬひふゝ家まてゝ人ゝ枕詞よみてゝ日ちゝくて
とほきあゝふふを
年ゝてゝ紀のふをゝ号ふすりふほゝやをきをかゝん
万葉集の武蔵歌よなゝくてある
ちゝの実れちゝ山乃山の名かすゝゝちゝしよりあゝふゝ体
いさゝゝ小鈴菜ほゝすゝ〳〵むさゝのゝゝ紀ゝ者も打とをきり
附つ風仲ゝゝ〳〵もむさゝの面も毎人をゝふふをひする
むさゝ聖ハ三ゝゝかやゝゝ三きゝれハさやもゝえぬ玉乃枝やま

長年はすとうやうむさし野のできぐるさく秋ちてうん
いまはすちの廣澤の変なぬさとて大やうはるは法被しるり
人乃かゝ家はくりてと求うえくうさるワさもせて
れかつるるきれい
かちをそえ年弼めるれかうとる丹こ紀よせんよりもそうれす
やんとそふきれたんより家かん科よとてうはき
ゆくもあすさ法ひきれい
今よりい波よあさしもしはをあさふゆゆなるかきあつの法
大窪天民のもとゝる工紀をおくるとて
冬ともはあすはうまを至をとてたよきうう法の友どせよ名
をき國の人乃もふあみやうとて
をつ人かりしかよはくゝ心はもれふうゝるを原とてまーやハ
大學のかゝ乃とく谷中の荘を又作りて
たのつゝふゝるゝやーの陰かれ花貴のまーきれ色そとゝるゝ
述懐
月をれよ才を因りせてそうすへき世のうれそ法ハさもはゝ年れ
れるーせよおなすすちこの友もふあるとしのふんうゝ色
述懐非一
さ因くゝよれもひそいつるうしとりひうれくとりひてるー昔を
獨述懐
やもすれいとはすかゝりそせーれきうんひとーき人ふきれ
こゝの原乃尼いかゝくーつゝもあゝうれのゝや昔きのゝん

いさと以ひてともよそむくん人もなく云うきあとゝひとれも

海邊述懷

かきつめや後のゝ玉みくれて人ゝとゝれぬたくひあるそな

あのれもゝ比ひとりこそ

年紀をてるまあひくゝはん人ゝあゝかくまて相ゝはさゝまし

懷舊

ゆくもすれゝ春りめる世とてきふ才を老のさゝとふれもひくとそ

秋懷旧

むゝへをうる泪と雨ゝこれいつれゝ秋ゝふ足堂ゝ雨

月前懷旧

たもをもゝゝ雨ゝゝゝゝ秋なれゝ月のゝゝみもむつゝきゝ

いはゝてもかゝゝてむゝふ秋の月ゝ世の人もかゝゝ雨ゝは

ゝゝ世ゝのふゝ雨ゝかきやゝゝ月もむゝやワすれゝきん

寄夏懷旧

人の世を夏ゝもかゝゆゆ見なゝふさあゝ苦ゝ立悔ゝあゝ

いゝゝつゝ才をゝいふ白をおゝて懷旧のゝを

年れいゝゝ夏とあゝたゝる世ゝいゝゝゝゝ才をゝつゝゝもみん

夢

数ゝゝゝ有ゝゝてゝみる夏をむつのゝおゝは誰ゝさゝめゝ

往事夏

ゝきりあふ夏の懷ゝのゝん云ゝむつゝ世と夏とは

月前世夏

れたるとちはるをひめくるとふあるゆゑにかくはいふなり

蒼生ふかゆゑ

もとをそ雨ふる日むかしをこのかとふことを

雨をさしかりきをほもくをやひとはもとはかへれて

標照の十三年れ忌は夏幡旧

かしはらの年をるものは五月の雨となみとこきり

貞樹のみまりきる又乃年の五月まるしをとのひ咲

るしをしのひを以る郭とな月ふ夢をきくんちして

こすゑの一のくるは吉保基ひのもとあよて橋のもとふ

きをしのふとふことを

雅るをは今はよをへ人橋のうすゐもとの香りをふ

校直のうかりゆる時ふ後ともくよみてたくりを

ゆをへてもとはなるふ橋のあるよ何へしをれはすや

れなすし人のすこ乃長は月似古とふをを

れをへて人はかりり宿るる月はむしをワすれてをすむ

ろ案をををひむしをの

まを向ををる独しはるもみち紫はあるををれの秋はへるきり

七月すえつるむすのきくるこ海りて七日はあるり

きる日をのもるふるるて第のふををりてを向とて

それつむもりなきをれを先ををて我ををかくはこはすべき舟は

その代はえるみりもをり　四万をふ伏のひつやいるん

なへをの世さへをそれ降こ後とあるを海

おへて雲の落ちかれもこの世を毎年とりとりてそなる
まことの花うもとより神を用ひなりて涙きる為す
をへて　秋かれて枯れる草もそなるものを四れたこと
もなとやうめぬとある歌
秋かれ　涙きの草のそれなりに花をそなるも春や涙ゝ
きくあいをうみてこせきるうそのあもれかせす
なりまきれかくなん
ふ花うりて七日まあらきる日菜ふ一枚おるとて
たもひきや山伏のきくをとる折おて神子旧のみちおさんと
冬ふ成てくとゝふ菅宮園ふ住をいてふよみ
きる時間庭雪をふことを

たもひおやれ生の雪をつゝ口きてを紀のあをひの伝を月人をを
きまの秋芹宮園ふ梅をうつ植うきるをの秋
菊うりまきりまきのありてをの梅乃咲をあるを
毒をの許ふりみをて一枝をうてれおせるを
よみくたりきる
ふさうはつきんをいのをの梅かををを人をを思ひを卯や
子花なくありて後ふえをのもをりふもかきぼう
れてうをせまおをせる菊をのは一つくを　あかを
ゆうはををる菊の花ふうゝく露のふさけををよ
とあるう
春をもまををの心をくみてをを春をえの名ふます　あせぬとも

たゝ一ぢにあえるより石淀の庄まで　あるをそこの
こゝ行あふさへこゝろ
陸こゝやたゝ人やもいつこ雅房　一かずねのすこれ去をわすれぬ
なき人をたゝるるすたゝかをうつするのわたをもそれこゝやこゝ
いこゝ君わもひこゝこゝ人川ゐのゆゑてかへるぬ去をこゝきせこゝは
お蓋こゝ一めくりの忘お和泉遠秋をこゝこゝを
もみちものるなこゝひをゐきおはこゝこゝわこゝも秋ゐ又や別をこゝ
すこ髪をさくりて当秋懐旧をふこゝ伐
こゝ伊ゐ秋をあこれこゝひこゝくこゝてむこゝやこゝて京さこゝちゐん
たなこゝ人のこゝこゝの忘ゐ月涙秋思こゝふこゝこゝを
長秋乃すたこゝこゝあこゝこゝ行こゝ弁ゐ月をあこれこゝいひこゝ君こゝも

神祇

神代より神のこゝこゝとかこゝを伊もりとかせる國こゝこゝのむ
て地乃神やこゝこゝの等代こゝたてこゝこゝゐむのみこゝこゝら
まくたこゝこゝわかりすゐて拝こゝむのこゝこゝ神代の俗をこゝ紀
百ゐくの世ゐもこゝこゝ可一乙地乃神のこゝゐ　大和一国祭を

寄神神祇

かくふやこゝこゝの国さこゝきくく代理てこゝこゝひきこゝ神の風雅こゝ

住吉

たくひこゝよ光こゝもあこゝ住のえ乃磯こゝちゐこゝす波乃上の月

摂取神社

かこゝりかこゝ百丹人乃ゐこゝ伊こゝ神のこゝやゐい　いくこゝへすきこゝ人

社頭林

[illegible]こしへよみ[illegible]のさろきにしの四くい神代の[illegible]やいそひそめし

社頭月

ゆく河の乃きよ紀なきに[illegible]と等代ゑいそいそあきんみくまりの神

人の賀よよもも紀ゆ島をはくりこゆ海須はをへて

[illegible]てよもきろし田の島山をありかよひつゝ[illegible]社も[illegible]め

宗什の四十の賀

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]世も[illegible]ゆ海一松風の夢をとゝもるる[illegible]のあ[illegible]ハ

さき茶を好む人なるまゝりて[illegible]ゝ

原泥法師の四十の賀

[illegible]の[illegible]をしめ[illegible]る[illegible]なれい苔の袂ゑ[illegible]世のとゝもる

白川が将元の五十賀

[illegible]の[illegible]ほのなれとて民くに[illegible]も[illegible]世もと[illegible]元をいのゝぬふ

須田の元の五十乃賀

[illegible]ゝ[illegible]もさゝ四くゝ色を[illegible]ぶ元ゑゝ[illegible]の[illegible]をまたて

佐賀の元乃六十の賀よ[illegible]祝

海原やよさゝ乃波まゝ[illegible]乃[illegible]ゝ[illegible]世ハ[illegible]元を[illegible]

寛高市河の翁の六十の賀よ六位のあを[illegible]ゝ[illegible]

硯

元まこゝろたくへゝハ元あ[illegible]なる硯のいゝ乃命ゑゝを[illegible]

筆

世よをゝくかをゝさゝめや筆の上ゑ生[illegible]ゝ[illegible]ハ元ゝ[illegible]て

雲

たのつゝ老せぬ君のすゑとても世もまほせ松のきゝを

琴

市まろ琴も面白やなりぬ人天のこと琴を世を傳へる

琴

陸琴の玉乃ひゝきに空なれつ夢をも人のたゝひゝねと

盃

も浦人の名ますむらさき浦おを高もくみてを世繁人

千歳ゝ六十の賀を後山さくあるを浦ゝ加と

海須ま浦りて波まれのうゝ加を盃の月

名よかゝをてゝのさゝゝのもとをおきり

四ゝ浦ゝの名ことの波ま加ゝ浦を後山さくあるゝ

松年一人乃七十の賀よくゝ久のゝ年乃ゝをもり

ゝらいゝ法つきゝ家

ゝゝゝ一ま世ゝはなん人乃ゝゝゝかひあるゝを世ゝゝ浦ゝは

人の七十の賀ま傳を

てゝゝゝや鶴乃毛ゝ後も神ゝれてきゝ浦ゝ人ま世もやちも

年乃ゝれま人の七十乃賀ま

あゝゝ一松ゝ後つきん君乃ゝれもゝ一へゝ浦ゝゝ世もすあ君

人の八十乃賀ま

す後ゝきゝゝまゝ世ま坂ま浦ゝゝれて八十後ゝ老の名もゝゝきり

神乃ぬ一乃あゝゝゝ月場ゝゝるゝを後ゝひて

百車引入つ尽く学もりてい[illegible]となみはれ[illegible]ろき門をも

志[illegible]ろ大久保忠陽ぬ[illegible]の[illegible]さん[illegible]を欽ひて

神のいろのみとりふ[illegible]先さ[illegible]つあきも深よ秋まて[illegible]て

人乃むこと[illegible]るをいろふ[illegible]て浦指ろふ[illegible]を

志ま[illegible]ま[illegible]のまはひやちきろん浦[illegible]の翅なく[illegible]て

秋

て地乃神もろ[illegible]れか中[illegible]を[illegible]ろ代のあ[illegible]む

春祝

牧[illegible]ろ[illegible]乃[illegible]ま[illegible]の[illegible]を立[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]一の郷

夏祝

かまりなきいのちはくろふあやめ草[illegible]ろ[illegible]ふひ[illegible]ま[illegible]

秋祝

あ[illegible]ろ人[illegible]ろふ市[illegible]ま[illegible]ろ[illegible]へ[illegible]年ある秋[illegible]ま[illegible]へぬ[illegible]あ[illegible]

秋ことろ場はろの数ろあもをさ[illegible]る[illegible]代乃[illegible]ろ[illegible]ろ

秋祝言

宿[illegible]ろ[illegible]五百の少彦を加りつて足徳の秋をいろふ里乃

冬祝

言ゆまろあ[illegible]ま[illegible]ろはの[illegible]ひみりあ[illegible]ん[illegible]のみ[illegible]ろ

夢星祝

天代[illegible]ほ[illegible]のやろをいくあ[illegible]ぬ[illegible]めろ[illegible]ろ[illegible]ま[illegible]せ[illegible]ん

寄歳祝

ゆみ乃代を[illegible]つ男根の加[illegible]れ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ぶ

雲かゝれ松さへおよふ君はこの勤おな紀世のさくひにはせん

寄弓祝

あはさ弓引かへしてよも山の波もりすれぬ世こそ安きれ

寄亀祝

おのかすにいくく島の名もしるくかめのよはひや君か世なるらし

寄松祝

ちる雲に枝さしかはす峰の松いくしのさきもかれとそ思ふ

花を喜色

いはる日のひかりすゝはふ紅霞とまちよ待くてそれの色かな

竹送年友

ゆきれにかそらぬ世も君しみも竹のこと語も千世すなひん

竹不改色

君かすむ宿のうゑ竹千世ふともあせぬみとりの色を社こそ見え

多

おみゝ代のたひらの宮のやちよまてに打かふ人々数もしられぬ

舊

日々を筆かつらにするまつりこと神代のまゝのためしこそあれ

玉桙いとまもあやなし紫乃をひたるゝ色とみしより

低

おひくき舟いつるそみの布衣袖のあさ紀もたもひくきめや

後

われとゝるの字をしよそへと石の常乃うはてさんとハみるよし
そるよ

祈願

その者ふしぎゆめをきりんかうをあらふ法乃ゆも侍人

勸持品

多くひろき薗を空くよ侍へと法法乃とれやひろき初きん

如是相

あの上ようほろふ月の花ち什ハあるとうゆも何ゝ法とあろ

自寛ゝ家乃うちの一方ゝ觀音大士を安置して

佐長ゝきゝ日水晶の数珠をおくりきるまの筑

のゆくゝ書つきゝゝ

墨となきゝひの玉をまなほたのむちうひや多ほさうん

れなゝ叶人ゝゝゝも髪をさゝりて發大清淨願

こゝろとゝ

人ゝゝれゝ法きちひのあをへてふゝゝぬ法乃ゝ侍ゆも多

ひゝゝ乃法代の

いゝゝへの刻ゝ乃法代のあゆもゝひくゝへん叶きゝの紀

かひやゝふゝん

ちゝふゝゆもかひやゝふゝんきゝふゝれあれい聖心を打宿ゝ多ほ

ゝやゝのゝゝ

者侍人の者をゝのふゝとはゝをなゝのゝやゝのゝゝりこれ

かゝふゝら侍の

ゝゝまきほゝゆもなひゝれて打乃をかゝふゝ侍のゝゝ之ほ人

拍名

うし

[illegible]ぬあつさふなゝひてや月のくきをもうしとみるん

あはゝ

[illegible]をとやゝゝゝはらつもるうきをあゝふ[illegible]

うたせみ

ねくひうつせうの小河のほき[illegible]

すゝしをいみ心ようたせうやこゝ人くゝきこゝ[illegible]

かゝひのゝれ

一[illegible]

やまひのす[illegible]

[illegible]

とありきれい

[illegible]

[illegible]

苦むせるいさあのつゝみ誰[illegible]

あ[illegible]

折句

[illegible]

[illegible]

あ[illegible]

[illegible]

施[illegible]

千蔭の家まで弟紫集竟宴しを付題とす

ちて懽うたふことを

かゝはらぬ人とひとつゝみそふ人ともたちまちふの多ふむ題

よ[illegible]なりけり